



わたしの聖戦

女性が働くことについて

123

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

猫の死に際

実家で飼っている猫が白血病と宣告されたのは3年前のことだ。

何か別のことで病院へ連れて行ったときに病気が判明した。白血病ウイルスに感染していること、おそらく母猫からうつされたこと、せいぜい5年

くらいしか生きられないこと： などなどを告げられたのであった。生後1年経つかどうかという頃だ。

人間同様、猫にも白血病やがんやエイズがある。しかし、猫のそれらは人間の病気とは少々様相が違っている。多くはウイルスによって免疫力が低下し、「老化が早まる」ようにして病気が進むが、

ウイルスを持っているだけで死ぬことはなく、したがって治療も必要とせず、大事に飼えば発病せず、天寿をまっとうできるといわれる。放っておいたらウイルスが消滅するケースもままあるという。

そもそもわが実家の猫は、ノラ出身である。知人が横断歩道を歩いていたらいつの間にか後を追ってきた。どういうわけか他の人には目もくれず彼だけをめがけてヨチヨチ歩を進め、しまいには肩にひよいと乗ってしまったらしい。こうなるともういけない。くだんの彼はその子を手放せなくなってしまう。しかし、

住宅事情で飼うわけにはいかず、ペット飼いは比較的ゆるいわが実家に婿入りしたというわけ。このオスの茶トラは、どうみても不細工な顔つきだった。まだ小さいのにすでにオヤジ顔なのである。しかし、妙に人懐っこい。こんなに甘えん



坊で抱っこされるのが好きな猫も珍しい。：と感心するほどであった。小さな動物のかわいらしさはまたひとしおである。久しぶりの猫との同居に皆が喜んだ。病気がわかって、一番に心がけることは「徹底した室内飼い」だ。つま

り、危険がいっぱいの外へ放すことを厳禁とし、安全な室内で大切に育てていくことである。しかし、ノラ出身ゆえに外の空気のうまさや自由であることの清々しさ、がすでに身に染みている。家と外を気ままに行き来する生活が当たり前とな

っていた。それがいけなかったのか。今年になって、みるうちに具合が悪くなった。食欲がなくなり、動きが緩慢になり、ジャンプ力は見るも無残になくなり、飛び上がるうとしては失敗して転がりバツの悪そうな哀しそうな表情をするようになった。死期が近づいている。そう思えてならなかった。猫は自分の死ぬときになつたらそれを悟り、死ぬ姿を人に見せない。昔からそう言われてきた。実際は、猫に死の概念などあるはずもなく、からだがいよいよときは人気

のない静かなところでジッと回復するのを待つという。そうしてそのまま死んでしまうことになるのだと。本当にそうかどうかはわからない。わざわざ弱ったからだを運んで飼い主の手のうちでひと声鳴いて死ぬ子もいる。性格が違うように、死に際もそれぞれなのだろう。

わが猫が骨ばったからだをひたすら丸め、目を伏せている様子は、自分の死を悟り厳かにそのときを待っているかのように見えるしかたがなかった。外に出たまま姿を見せないようになって数日が経過している。すでに朽ち果て土に還っているのだらうか。たとえそうだとにしても、見えない死を穏やかに受け止める術はない。改めて厳しい自然の摂理を突きつけられ、しばし呆然とするしかないのであった。

イラスト・伊藤栄章